

和痛分娩の説明書

1. 和痛分娩および麻酔法について

当院における和痛分娩においては、妊婦さんの痛みにあわせて投与量を自己調節できるボタンがついた patient-controlled analgesia (PCA) ポンプ (右図) という器械を使用して、麻薬系鎮痛薬を経静脈的に投与し陣痛を緩和します。この鎮痛法の長所は、自然陣痛が始まってから御希望された時に御自分で麻薬系鎮痛薬を投与できることです。ただし、産痛が完全に消失するわけではありません。鎮痛効果には個人差がありますが、当院における使用経験によりますと麻薬系鎮痛薬投与開始後の産痛は投与前に比べ約3割軽減されます。

PCA ポンプとは...

御自身の意思で鎮痛薬を使用できるようなポンプです。(写真)。痛みが出てきたらポンプについている白いボタンを押して下さい。すぐに一定量の鎮痛薬が注入されるように設定されています。鎮痛薬を安全に使用できるように、自動調節されていますので、薬の使いすぎを心配せずに使用することができます。



2. 副作用について (括弧内は当院における発症頻度)

- ・悪心および嘔吐 (8% および 0.2%) : 麻薬系鎮痛剤の投与により軽度の悪心および嘔吐を認めることがありますが、投与の中止に至る程の重篤なものは稀です。
- ・鎮静による傾眠 (10%) : 軽度の鎮静および傾眠を認めることがありますが、声をかけても覚醒しないような強い傾眠が生じることは極めて稀です。
- ・めまいおよび呼吸抑制 : 当院での発生例は認めていませんが、麻薬系鎮痛薬の副作用としてめまいや呼吸抑制が指摘されており、その結果として麻薬系鎮痛薬の投与を中止せざるを得ない場合もあります。
- ・微弱陣痛 (20%) : 鎮静効果により陣痛力が弱くなる場合があります。分娩経過が長引く場合には、子宮収縮剤の投与により有効な陣痛が得られるようにします。子宮収縮剤の投与に関しては別紙「分娩誘発・陣痛促進 (子宮収縮剤) の説明書」を御参照下さい。
- ・児への影響 : 麻薬系鎮痛薬は児にも移行します。出生直後のお子さんの呼吸が弱くならないように、子宮口が全開大したあとは麻薬系鎮痛薬の使用を中止します。また、当院における経験では、お子さんの呼吸が弱くなる、いわゆる無呼吸発作の発症頻度は和痛分娩と非和痛分娩で差はありませんでした。しかしながら、麻薬系鎮痛薬の影響で生まれてきたお子さんの無呼吸発作出現の可能性も指摘されており、そのため原則として新生児病棟への入院の上、注意深くお子さんの経過を観察しております。

3. 費用について

和痛分娩ではその処置に対して約3万円が分娩費用に加算されます。

4. 予約について

和痛分娩は無痛分娩と異なり予約制ではありません。御希望される妊婦さん皆さんに受けていただけます。外来における妊婦健診の際、医師もしくは助産師にお声かけ下さい。